

10年後の自分考えよう



熱気あふれたシンポジウム会場

高校生対象に シンポジウム

10月7日の土曜日、「10年後の自分を考えよう——キャリアデザインとインターンシップの役割」と題したシンポジウムが九号館で開かれた。大妻女子大学・多摩大学・中央大学・帝京大学・東京都立大学・明星大学・多摩ニュータウン学会主催によるもので、当日は、高校生、大学生、社会人の方々が総勢400人が集まった。

中大・都立大 などが主催

優秀の定義は目標 をしっかりと持つ人

「10年後の自分を考えよう」「高い目的意識を持つ」と——などと言われても、就職活動を目前に控えた身としては正直、「一年後の自分」の行く末が気になる。そこで、実際に企業で人事を担当している企業パネリストの方々に焦点を当ててみた。いったい企業は学生に何

を求めているのか。

ソニー(株)人材リソースセンターの服部恭之氏と、富士ゼロックス(株)採用センター次長の坂田政一氏が、企業パネリストとして出席した。まず、服部氏から、いまの学生に対し鋭い指摘が飛び出した。「昔は大きな漠然とした目標を持っていて、それでいて、すごくパッションのようなものを持っている人がたくさんいた。いまの学生について思うことは、『資格を取らなきゃ。いい企業に入らなきゃ』など、目の前の目標にのみ捕らわれている人が多い。」

「超氷河期」という状況と、年々前倒しが進む就職活動の早期化という2つのプレッシャーに踊らされてすっかり近視眼的になっている自分を反省した。

服部氏によると、最近の新人社員は二極化しているという。一つは、仕事にあまり意味を感じていないタイプで、このタイプの人は面接時から会社はずっといる気はないと明確に主張する人。もう一つは、仕事に野望があり、ソニーというフィールドを使って、自分の目標を達成しようとするタイプ。もちろん後者のタ

イブを優先的に採用するのだからと思いきや、そうではないらしい。「たとえ3年でも、ソニーに入りたい人で優秀な人は採用する」「現在、ネット系やソフト系のビジネスで活躍しているのは、実は3年から5年目の社員なんです。10年経たないと成果が出せない時代はもう終わりでした」。どうやら企業の側の状況も、大きく変化しているようだ。

もちろん、各企業により違いはある。坂田氏も「富士ゼロックスでは、ビジネス構造の違いから、5年から10年で成果を出してもらえないという視点で選ばざるをえない」といわれた。また、坂田氏も最近、面接時に学生の二極化を感じるといふ。一つは、「自分はこういうことを学んできたから、こういう仕事をしたい」という学生で、もう一つは「福利厚生が充実しているから富士ゼロックスで働きたいという安定志向の学生」。その他の能力が全く同じなら、前者を採用させていただく」と発言された。では、企業はどういう人材を求めているのか。パネリストとして参加した高校生の長谷部桃子さん（都立武蔵高）からソニーの服部氏に「優

秀の定義とは」という興味深い質問が出された。服部氏は、あくまで自分の個人的な見解としたうえで、「目標設定がしつかりできていて、それに向かって自分が進むべき道を知っていること。そして、今すぐビジネスができるスキルを持つていること。この2つを合わせ持っている人が、優秀であると思います」。さらに「単なる資格を集めるコレクターは要らない。その資格を使って、自分はこういうビジネスをやりたいといえる、もしくは将来こうなりたいから、今そのための勉強をしている人が、能力が高いといえます」と答えた。富士ゼロックスの坂田氏は、「自分の持っている技能を捨てる勇気を持ってください」と主張。面接の中

キャンパス・インターンシップも好評

最近では、大学進学率が80%を超え、「大学選び」がキーポイントになっている。

この流れのなかで登場してきたのが、「キャンパス・インターンシップ」である。高校生が大学生活を経験し、進学目的を再確認したり、学習意欲を向上させるものである。中

で「一生懸命やってきたことは何かなぜ、それをやって来たのか。その中でどういうことを得たのか。辛いことは何だったのか。それをどう克服したのか」をみるといふ。さすがに人事のプロたちの視点は遠くまでをも見据えていると思った。

また、今回のシンポジウムには、企業人、大学生、大学・高校教員がパネラーとして出席。開始早々、司会から「10年後、何をしますか？」と質問が投げかけられた。これに対し6人の高校生が「教師に憧れてます」「社会福祉関係の仕事をしてみたい」「司書の資格をとって図書館で働きたい」「法律関係を学びたい」「悩んでいます」と、はっきり表現する。ここまで高校生が自分の将来を真剣に考えていることに驚いた。

中央大学でも商学部が昨年から実施している「Hakumon ちゅうおう」10月号を参照）。

パネリストの北村敬子商学部長によれば、キャンパス・インターンシップの実施成果は、「自分の志望動機の確認ができた」「未知なる分野を体験できた」「大学も捨てたも

んじゃない」などの好意的な反応が大多数だったそうである。

さらに先生は、最近のビジネス・インターンシップに見られる「大学―企業」の融合だけでなく、「大学―高校」の融合をも進めていく必要性を強調された。高校時代から目的意識を芽生えさせようというものだ。それぞれの10年後、20年後の自分の姿について思いをめぐらせた3時間であった。

◇◇◇

この日、シンポジウム開催に関連し、別会場で、就職部主催の「インターンシップ・フォーラム」が開かれた。三人の学生によるインターンシップ体験が報告され、続いて「やりたいことを仕事にする」と題し、学生社長としてマスコミに取り上げられている、本間毅さんの講演会が行われた。「社長になりたい」という大きな夢に真剣に向かつて行動した本間さんの、目的意識の高さと実現させる人だという熱い気持ちを分け与えられた講演会だった。

文〓学生記者・船橋 智
同 友松 千穂
写真〓同 大谷 秀之